

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

古今和歌集正義 春下





古今和歌集正義卷第二

春歌十

願あらば

讀入へす



まやまやたま引やすみとまうまうのわんとやうがまうりゆ
す長岡なる日新よおすこまうんわせ櫻乃今はまうん
てやうすおよ色まうりゆくとお今を風ふそぼすなむ散策
らんとまうりゆくとまうりゆま宣虛の意まくめれむす
くめきる能をもとづき宿の本なりそれより其ののまゆく光
とむくおひれからまきだまきのうへまとにうのうとす
も皆ちる事とて神代紀よ如本華之俄遷轉當衰去矣と

あらなむされれぬめうのうひやもまよとよまさへうをちりを
きせうへそく色れまするもうるとつまふをもの色ひを
いふもの色也とあらへ一題はうのうとつま事すまもと
ハ色事すをうつるあるとつま白葉れ葉すまもとあらぎ
ても敵をつまきかとされは車あこめと諸道たやうあ
んまきはあられ一密勘はれうの事の敵もと北
す盛なるゆきゆきと敵ゆき起らばくとあらぐ
北船れうのうもんとあきえうを事よとも弦つるだつま
らすあらゆきとせりぐんや

おまうとくまわらへと角おねやくひなまと横よ思ひます

浦くとくまはしきの花はとくまくんならと橋を金やくみ
速くある方よ付く、やうとつもなくひやもさちひやもくち
えくへうなるねり橋ひとよ思ひきと一川の底を晴めうれ意也
○歩間よちくとまことと遠達よシハラクチラスニ待テク
レトキノラ聞入レテといづる共よ悲也あも只ちもとまことと
ちよすよすととよすあすちもとまこととちくすよ居くまよ
一歩よ思ひうと諦ちよせちよすよまことちくすよ居くまよ
て外よましに事あるせんとこれとんじも行をまくとよす
行すよまでととよせが方よりゆくまをあくなどやうれ
あくふ縷となれうや一またとつよちくととあらがこと

かくはれをとまを聞かう

あらゆるちるをめぐたまとももあつてせせとせせとせせうじま
ちゆもあぬ事なきとす教とはまそそれもあらうちるあ
うと枝の意をくわむよこたるもあれ神の神と
ボアラヌセ申すあらゆる大方ハホのするぬとす古語と
命長とは死年とひ故も軍よたそ死ん事をゆすき
のよづらなど清第二義をすまく教をめぐたとす
ス全く同一命長くても何よりめがの祖とひのりを
れとそと心なづんを雖うなるつとなれい中で成ゆまく足若
いやんむだとゆなり方と願ふせの次され草と成るを

今をすまうせるねかくせんば

せせしにひみをぬへとくらむちやせすひく家路をまそ
掲めなれ教をるもおやうろよ家よゆうじらまくくによひ
森れ里よ族のやせんすむひととくを教めまつひとちもみちる
事多く教め盡とつとも諸のすくはまくとく縁よねのま
されよれまひする方をも恩をゆくよとまく來むとくある
の意と只ちるをくく歸りとふくとまくひこすと同一
とく意滑く花せぢにまくく通の名を復むよとれよ
ちのよまととくとすせせとすせせとすせせとすせせとす

アシヒキ

山ト比可流毛義知葉能知里能麻河比波計布仁聞安
留喬母本トあるを教内盛ト今又トもあきと其ノトモ竹教
乃浦ニ泊リテ之をくどよめかねますとくまアトス同
卷ニ大舟之渡乃山之黃葉乃教之乱尔妹神清小毛ふ
見カムトアルの事アマシヤクモキリ實ニキムト是モス
教ノ乱ト妹うねもまたハモキリテアマシヤクモキリ教之乱
モシソ而ニナシモカムト意モアミナヤルモ申する意モ
出る彼ナレハナシタク方ヌシトサクス所も人ナシス其
ナシタク方ナレ詞セカタムト忘却セム意トヨメニモ

○遠鏡ニヨヒハ此里ニトマラウ事チヤキ内ヘイヌル事ヲ

ハ思ヒタサスニサトトキモ非也こそ後よりん事モニシト
墨ニヤルトモトモト今日ニセ教内盛ニオ合キテ面由ニ
然アシナリキナシトナセ思ヒタサスニトマラウ事チヤキモ
うまく希ムハアス内ヘイヌル事ヲハ忘テ此里ニトマ
ルテアラウ本ト解一

ト内セミナセヌトセム花セトテマトト内教ニシモ
ナシセテアラトモナシ人代セモ似るが如クモアラヌモ
教ヌトナシナキうちの意ヌケテ教セ時の間ナシト
人间有事代セの程なきにナシク難トナシセラバクレ
ナシトナシ代言ヌカナリナシセラバクレの枕詞花擣

た橋の内代一種多く其色赤くれとれ深の意ありテうじ花
橋などもよそそ一木はうつらひやまきのよい室もかほの其本ね
乃傳又あくにれぐるの称を活く語されわほふとくがなよやう
せずよりたる詞を飛す草木の地ヌサギ^{キリ}月日もすり匂ひゆき
ぞう崩^{モニ}うせなよしとそれよりまくへ轉を用ひ或ちかくも
なよ活くへ委をすと外よ安きを此教などやくにせせかく此
間よおくれもうととくうちかは意となむ也

○遠境す喉イタワト思フタウチニハヤカタ一方カラ散テシマウ
タワイといつは聲うそと聲を對てソナアレホモ此
一方うなじがくをうけくつ之意をすうとせきうちもと

あ腹すそれと拘りぬてふがだせとあて一同一事を嘆ねまハ
かの寂もむなうりんよしづへ然でとが先一叶よ風葉す
すう春ひの晴ふら引か戦ひ故ハ日戰日學仙^{ハシ}の詔勢
聞^{ハツ}聲を寢すとどもなよ其義あ腹されと片一方れ意
有^ハ二叶^ハ福^ハをき事を前後^ハの経^ハを左右^ハかくよ
自然あ文^ハなる聲ひあくよ似^ハ事^ハうはまくすとある
義^ハ付く車^ハすとと後^ハとす時^ハ達ひのり^ハせん^ハを
傳^ハ遍照すみくお^ハのり^ハ あま^ハのアムニ

櫻花ちくちくなんちくひとくわきと人代來ともやくすり
雲林院^{スンリンイエン}さくらば花のちくひとくわきとやくすり

そらくは師

楊ちるちるのとこうもまなづらをうかがひます
や並院は淳和帝の離宮にて仁明帝慶子一院の後常康
親王傳頌とされ、在しまで出家の後遍照寺付属して元慶
寺別院と名給てよしむけ其結構を思ひやう座一
強の楊のあ焉には紫野のつまり舟岡とけく数千株の花林
なり一楊ちるみるくや林院の甚花の所を来く入れてやう
長岡きまくすむれすれと雪せ降りやうく消つてよきくすく
ひや葉和の行幸は園賞池塘錫宴群臣などあうと思ひす
やる池の中島より行代提をかけりて彌わくねく堰をさ

らん實は參拝最中れこもす

○歩向る花林の御所の敷面と三と四と十と十二と遠峰を
見よ徑ひく初二向も楊花のちるあまくつまなうとそは
ひ難き故よ花と敷と下よよとすとひよ草よ根也この敷と
ハ木よよ木よ木よ花林の御所と要すとくくらる今ま(其廣)
なる院内乃花景おのづからぬゆめうすむらすのせひくきよ
すてトよよせーなんやハ然ひさんと想ひく楊花ちるあま
花のくよまふを聞なれく雲林院のさすふあすす或黒車よ
らぬへ咲すとあぬまれば次よ同紀氏の歌又雲林院よま

かまく橋代ちやうたるをよもる雪と夕ぐぬまゆともゆと橋代
此教は被とひきつるがとあやせのうじもとて度き境内
の落花おとま思ひやうて又遠鏡は春ノ雪ハ其マ、消ルモノチ
ヤニコレハ正ノ雪テナイ櫻ハナチヤニヨツニテといふを此を春雪
の清やすきよ對てく清うそとてくらまわす只樓うすま
ト清をなき花のまわりにせんじひくするかく清うそと
くすとひく雪とやまなす北寒景をほりめくろぬにされハ今
と雪う降れといづるを意なれど其まながくのまも雪
のやめねりていつると長雨をまなづ雪を降つて
ゑまう詠調を清やまと春をつらうすと同つき

なうんや吟へてかへ

橋代おうちやゆくとひくよみる

素性法師

花ちくす風のさりとたきうある秋よぎつよのよかくうみん
風もしままかようと形もすれとうみんすすなやうら
さうあらんぬすたあらわあらん事よ思ひなきうすむをき
なくすむをき

うらん院よく橋代をよみる

○○○○法師

宝橋よりおうちやなんじとせりありなぞ入ようときめくせん
諸注素性其六歌書より又部立氏名の文をれうよ付くせん

秉均セイ也あく素性スイセイすんとスントだ不審すミシすとミト接
すりよ三代實錄云元慶八年九月十日丁卯權僧正法師大和尚
位遍服奉言雲林院者故無品常康親王之舊居也親王出家
為沙門貞觀十一年二月十六日以是院付焉遍服曰深草天皇賜此
居之天皇登避常康靈醫累天恩極德猶難報恩欲求者精
舍令學チヤウ天台之教伏思元慶寺永置年分度僧二人傳天台之
法行試度之道請以爲元慶寺別院成親王之心願矣但院中
難事擇下遍服門徒之堪幹事者令其勾當クダウ勅依請聽之マニ紀
略云寛平八兩辰同正月朔行幸北野雲林院有子日宴遊略雲
林院之院主中性法師住權律師ヨウルシとあるされど此中性法師と云
春下 七

の元慶八年奉言勅許の時雲林院の勾當クダウとなりて承りを十三
年比後仍奉る時又初く權律師ヨウルシと住ざれども又寛平ニ庚
戌正月十九日僧正遍服寂年七十四略素性亦善セイ僕ボク頗タメ有文風
住歐陽院位性任權都焉雲林院別當ヨウドウとあると僧都また特
任して焉林院は住持スルヒと見よりて是をアリ也此號を
す亂ハラハラうち院主位スルヒと其勾當クダウと稱スルと思ふと云程の述懷
なり其名の似スルよも素性スイセイとも誤て是やア彼奉言代聖
年仁明帝比御せと承く遍服の寵遇殊タタキ盛んタタキと法藏大
法の親昵タタキに付くと辨議奴心の侵多タタキく恩タタキ及事タタキあ

だなむれんがをとなひんや歌のひと機ちくと考よ我もち
れえんあ三盛あんまきひと人ようとせんす
やうきる摩カタイとせ人はアムギト退くよ志ミテと盛
も虧カケりん戒懼のひとすりぬめおう花のとふ一盛ヒジカル
ヨウセイ人ようきやうてわくとめすめさうもくたまゆ
はも又見えかくまぬ秋よなをさん寛平法皇護院御幸の
時の菅根卿の序文は桜浦院主性獻風流數藻カタと書き
て當時退教をもすちとひなしすとまだ長秋又秋乃に
葉と人とのうちもくほれみ又紀氏のちよ花もえれ教め
宿へり春北里とせたりぬてうまことなど皆退教をもす

さくは秋今教ぬ一すとあくまくよめうそにかうも教花よ向
ひくよめう心とも宣あくみばうやん花と機の花とよめうとて上
此二首のやくちるをやくとと書きざるせとととえやくとて
えよじすきんをみハ機者其心へしと滑く落花の中よ
入なづく前段の詞書といたくとてあるを

○遠境よトレヤ櫻ヨオレモ一所ニ散ニテトウナリビナツテシ
マハウトエ物モ一盛サカリナ時カアツニソレカ過ニテオトロ
タナラハ老ホレテラツシモナイヤウスラ人ニ見ラル、テアラ
ウホトニトシタキの人生に盛過くと老のつらん
そろと福くもて教うとまくさんも差やういふんよ其盛

ま、まくまよ老らんあらああまくと難くアリあら
まやも家道の身すんと全脚盤あはな入る夢かと見え
さんとアラと驚お詫びをあれ過る老やまとどりて
うよ解きてはまのなんやせたうちおみす更よまじ
うきりつてはまえをまきく一轍過るやまとあも
まきもやしめ一轍ありまると有がやめひとよ衰老を
歎くとアヒトよを強たるをもつてゐるを
あひれをう人のまうとまくわゆむせよみくも

ひまくわくわくとおもひを数えぢやん

卷之三

とおもひやうすに思ひよがれりとておもひ
たゆだくまとゆよじゆまなれりとゆだくま
てまくまとやうよ落きゆまとゆ請ひとれ
事とゆやめやめとすとたゆよ惟喬のれこおち
らすんぢすととよみやまびらだ同一詞方
黒まくちあきく今を待とゆよ強くひられちま
ふうりとあきくあきとやつゝ来られと候たつよ
也今たあくみんやうれ章をすととをねとおまや
ほき極め入れ來れとおまきしと思ひまうだよれをわそ
浦へきすす用やく

○お同よ相あらへ男女の達うるまをあひへりとおひづり
とも言ふ常比事也然まこともこもたに相あらへ人とまとて
聴く心得へといふは非也あらへは我より頗もと云称
よてせども國としと語り皆其意推くあへしとくそ
ち知りの友とすれど凡あり同へてたるをつとむるに
あらず是を因れねへ一年のわざをみくらんと同へしも也
吏婦りとゞ跡更よどみに已うわく領ある事外の鄰ひなう
宿を又相の言を我と入と對する事比隣とはされがへ
ふへ今常よ相待相添相處らすなどつま達へくす
○遠境々此間チヨットキテ見テイナシヤツタス人カミヒト解

え非也この甚うあひへるゝまれ、まよまよまつて來へる
事有るゝとぞあらへなす事めづくなんんと其意を
滑くよそなよ一日半とぞきをされハチヨット見テとぞ一チヨ
ツト來テとほとほとす入りとぞく、とくたとひ終日面をあ
せらうと色同一席又ほしうすくさんちやうすり敷ひとぞ一日
只今とよべく一時間たりとぞあらへる語り人をハ只一
日乃とほとほとすくとぞ思ふ

まよまよかとすくんとぞ花ぢやまとたまひやうきりと
こもれやれひくとよべくのうち時よ風よあらへーとぞ

おとづれぬにあらゆる種類をもつてゐる

きりはまをよむる

後漢書

たまに坐る事よりは、もつてぬかよおしをうちうらまう
には簾をあらへ候る寒夜のときまくまくのと志
らぬまゝのものいひ日數を一とつきには非難又記され
て何事もあらえをやう一回なり。一とつあらえ物をあらゆる候
の様子など、さうひとときのきくあらふやうをうらう極と見ん
るよまた方數題のうちにあらゐある日數の題をあざりて同書
よ聞あれども、あらへじたまくあらふやうをいふものやあら
らず日數れどもあらふやうを因縁よアをあらむにあら

東宮雅院より
橋代のみをよちまく有れり
とぞくよかたる
もよめ高也

卷之三

卷之三

枝よりもあくよ敏かまなれも落葉もあらわすを
そくはるのちやうとよみ

おなじみのやうすをあくまつ様に見られまよおのこわき

やまなみの期となくひの約するたる言ふて今をやくあむ

本居宣長と申すてくちも、いふと思はずとみてもさうなづり
先恭紀の許等梅渥^{コトメテバ}、
先恭紀の許等梅渥^{コトサケハ}、
先恭紀の許等梅渥^{コトフランハ}、
先恭紀の許等梅渥^{コトフランハ}、

きなも期カクレ^{ヌテ}要^{サナ}期カク放^{カラ}期カク落フラかくありぬまれるを
つとめりき事也又あよきうへうとそくすん當方カタよしの
根カネよほりくすくんをふたとめくらまんことおのへ根さ
くとくにまをなくへと省カナヘるあく又後なるア
○條枝カツチ常カタニあらわのひ放カラとひち聞カミるよするを
黒カマまなくと解カミる遠鏡カミは星ヒルと被ハシしてトテモ此カタニ
ニと種カツチる者カミ非カタニ中カタニ遠鏡カミのトテモカミといふ其心カミよ
のカタニたすあらわのうカタニ例カタニの讀解カミを更カタニ其
辯義カタニ何カタニの事カタニともうまくカタニ代カタニのとカタニと引取カミくと
いと解カミきらのカタニを推カミこすてくをよけらカミよひと根カネ

一言なれど其本はひよ達カミをとゆ事カミかーとせを
構カミれとゆくちるゆのとすと入り込カミれとよやる
たとくとくちやあとをかわえず人代カミうう風カミを喫カミあ
畢竟カタニ何カタニと心カミもとくちるゆの本カミとよ意カミを入れま
付カミれまたうへきよとせれんこうりあくへう様カミ
やすとくとくめくへうあくねカミあくめれ意カミとく彼カミとせと立合
のカタニとく私カミあくまうとうひりりと祐カミははと立向
ふ勢カタニひくううをうきせ外カタニとくあカタニなまれとの邊カタニ
なれを今カタニ入りをとくとく風カミの吹カミあん間カタニ筋カミを
さく代カミの筋カミをよやる
紀カミともりを

名のれひるをあとけこまればよあ門にあらなく花のあらん
あいに心も酒もくやべーあいせれさうかきえとあとけ
きらをつるそめのうはれ詞也上すりしれんを同しすむ
ときを調うと自然心を達するの也吟してあー

春宣れあらまきのちんとく機比花のちんとく

益原のゆかせ

春をも花のあらとよまくあけんほのやうのあとみん
さくらの益とよまく

風河内山行

あらみよもとあらとよまくあけんほのやうのあとみん
さくらの益とよまく

さくらの益とよまくあらとよまくあけんほのやうのあとみん
さくらの益とよまく

春の奇なる一

ひるよみはまくわづまうじさくとゆを

貫之

ひまわくはまくわづまうじさくとゆを

歌一す

大伴黒主

まみわのゆうなまくわづまうじさくとゆを

亭子院教令の詔

ほりゆき

橋もれちとゆう風れなまくわづまうじさくとゆを

なまくわづまうじさくとゆを

ゆうとくおりやなまくわづまうじさくとゆを

春代うこととくよやか

よみ代わゆせた

その色をあよこねてアラモテトモキヌメヌマシルセ
寛平御時モトハ宣の歌合のう

素性法師

はあれある今とほもうか一まそひうら色は人並ひ多是
菅原拾遺等は初向花はあもと者を共に花咲あを
今も植樹一其花の営教まく成る事は勿うされど
うなりて我へあくべと人なくひくも花代あくべ
一きよ人ま(あやま)なふすのとひやく次まとくま
りゆよきいはまく野つよこうれ代あくまんき思ふと

歌あくべ

よみ入へす

ちま代ふよおむきとくさと同人の諺とく彼うきこころ
也梅もくふコシキくさる方代情ある人セタリとくのうり
歌あくべ

書代色のうりいたぬ軍をうへきけるたぶとる花代三色
うち立たれ敷ひるくわぬよすあくまくとくをとくとく今
の常と同一色の色代色などあくまくせせくもなきわ
た古今ともつて事なし即ちつら辯義一のよへくをあく
事なし外ニ安セモ今ま代色とつて漢國の春代文字は
ほきそつてゆくはうの諸夷うこよ風色雨色とあれどこ
よ風のう雨のうとくまた其金も國色密色をくわづら國の

お宿れいわとすくをなきを思ひて一詠此ごろま氣のれ
一すくのうてゐる所すくのうとあへどもよれ
おさげる本あらと又さうする本あるみゆきふとつは里と
いたくよすく鳥なき黒花井とく墨をとる墨也而
ともんと同一とせばうはうりに諾あせよ

喜むこととよむる

けりゆき

三端山と一かじりすまのすこ人よ喜むれぬをれやさん
こは壁へかけたりき大あるりうぎねれくがこくやうよれ
したるせあくまぬとくわくいあくまぬとくあくまぬ
あくまぬとくわくいあくまぬとくあくまぬとくあくまぬ
あくまぬとくわくいあくまぬとくあくまぬとくあくまぬ

おもひて霞の立満くせむはやすく人よ喜むれぬせむ
てきくわやまくんとせむを同化者ひどいとくわくわす
おけむなきよすれてねちみて奥またゆうくとくきハキヌマ
すとくわくぬ一とそ初二句ハ萬葉卷一二輪山乎然毛隱賀
雲谷裳情有南畝可若佐布信恩哉とあると同一星より
られるう又たとく時よむをひゆううなうて一たよ意
たよとくすよと六版すとくにちもからすとまく月
支とも思ひととくと一首こわせ明くのなみととり難一音
丹集は源頃萬葉二端山とくわくいあくまぬとくあくまぬ
らなまともじうとだよとだよの山よまた大物また大御神の社

かなくてねど、ほきがおもむとくひこまをねじての門を
うちゆ人へとおもひすりあらこちそれと當時の意とも有
りんが捨遺よりおひきをす。義林院引と人よきれぬが
やさしくんとよだるをあ向なと今く同一星をす。時をせを通
きく入りへばなまは花をうる人よきれどす。まんと云
今どとくよられど

うやん院のみれゆ。よ花なん北山のやまとす。まつりゆ

る時す。ト。アラ

そせひ

つきりとまれば山へよす。やなんくとれとなりの花れけんと
こね古本う一本よみかのとよかとあらひ。一づけんとひ

三毛とトよと書たるをゆふにとありそひ更よすす雲林院
山ふよあらういあらかまはみこれ。汗侍一奉やまと遍服さ。小
山れあらう花アノ。まかづく。秋の郭よふじよ僕。遍服と
草拂一よます。けひよ。おもひ。お葉を袖よこひへく。ひとおな
んと。因人のよひと。おれ雲林院より遍服の侍してゆすあひ
し。かく全く今と同。こそ常康親王の遍服よこの院を拂りぬ
ひと後。お花見ハ。まき親王。お花見。拂なれ。も遠うあひ
て。秋の意を。と。若。を。そく。詔。を。頸。本。奥。義。松。華。よ。之。の。匂。ま
と。お。ん。と。あ。う。か。と。密。勘。よ。迷。ひ。な。ん。と。す。と。ま。ん。と。點。を
あ。い。く。可。用。の。せ。ゆ。と。あ。や。こ。そ。ま。と。ひ。な。ん。と。続。ひ。と。く。酒。

なむくまんとすまを達とすとやくもくとまくとよ點
あくとれどもとひと統すて一まとひ一もとの事なむと
伸きよましすとせんほく思ふともむきよるまとじゆき
こち思ふともむひせら夜と辰鶴といつも同一是と云ふ頃
トキ
圓廣の意と思ひあやまちーりやまとひなんと清うけの用
言ぎた圓廣の詞ありあくとまよひも度ひうんとさうえ
せうく度ひなんとあくとま意とくわゆハ直一だらりとまう極
あるひする年れ法の時さふゆかもなきのねれけふとけ
なれうつせ教はよれうと初向のまひすけ日暮ちせまの
なんととれうと中勢集は思ふともまとひてやまと極れきと
かしきとよきと

「方かと今とあくと一又すくとくは無熟の意もり起ふく今
を一ほの詞となくするに葉用うる意と成く今れ候まだくや
アヒとよ本と思ちふすより生く諸也、主と諸注本の意れな
せやうれとつす方よとれを想とんぐれをあくとくとてと
なむけの肆ハ多氣の意すりせんとすむのまよせを
人との部言ニ戯軋トテモとく感をも言よと備ふる
如きと思ふて一せんと一首れ意も、モトハリトモとせんれして
としとてんれ漫であそひなむすやくかうきとみまくちよやと
もなん、たなむれりあく花れ法を詠うひてとせんとあくま
かしきとよきと

○歩向又雲林院ハ北山の邊ニ在リ其二花兄弟するを
事と申すよ書ひ文の一鱗也トヨ僕は遍服うどにを以てま
がそノ時ニ事ヲ同一書鱗也トヒテ諸侯も亦思ふ事
非也、以て遍服うどトシテ其殿へとすそ何を黒なる文
此を亦遍服うどトシテ其殿へとすそ何を黒なる文
也遂又其例より北山の事は其院なくてハれらず又
之また又其詞あくまく同不んやハ今ハ驛旅乃郎ニ惟喬
のみこれとまく猪々すれの時ニ天河と云ふ所を以て行
く同一文も然も彼天河乃端事を其雲林院の不ん代供
あるとまゆりく書たらあらまく物語の機へなり事すと其

而ニ毎さりとあらそと今本ニみあゆとあるはよく書
誤ありと知テ又同書ニ母北山と平野のせれかよ大北山小北
山とア村ある其あたり雲林院ニ近レト余故付くニテ
其ノ非也より近ラんと其事を直ニ雲林院とモ一室も
ヘリんや次や半里許を満てんや又院内内花下ニあら
とまゆり山邊トソヘリんや又山陰の後麻ゲトモナリテアリ
院内ニあらんと今更がうろをなきの陰うもなとあら
なす、もん却く何の興、あらん又同書ニナリテ物語と
ユアリニテ中ニ書舟集ニあまし、つて、なまくのよう

よしとお風ふうたをもとめにあへまへあきとも、氣の
あす事はつても、せかくも坐せぬいおり、せんとあら
等間よよきへりへり、其入を今へ立へよとふまとある時
小の門はまことじゆくがりまかとゆくおめじたくあれともな
れかくすとやうの意とて、ハ更ゆやみれ諸の事よほそと
たまつぶさむ事とて、よりかく強て言ひどく是後機よ
めれ繫の便わざをも、なむからむるめれ繫の便を
ひめ外もなむれおきけ言のまくなかきものなつてれ然り
ちよへてよき

いづまくうせくよこわあくやまんを一ぢくすひもせむ

歌ひす
よみ入あらは

まことにわざわざあらはりなめとひひん、といふのちせり
ああひみんとの相いれでうらあへと同じく相ハ輕くそほきり
まと思ひんとのこを達て思ひのこと思ふへうすたよ達とふ
ふあすたとみんとゆゑを年へ春とれた花の盛ハあんすら
とそれらん事ハあせり其余あすとあくべくよハ只これせり
とゆことちすと老入或ハかようと入述懷なり一恨りあよ盛
ひきよりとアんじやうんじこがくとよりやとそそとまきぬ
ゆふあれはともぢれきはせとなつを立りて勧一たるを
たわとよれきはせとなつを立りて勧一たるを

かくをよあつてはまちねやうひみーちばはよきよどいた風
頭注はせ一枚もとあり密勘しもがくと本一回じも余板よ書
是を今此刊本よりせ詔の注本又古寫本とし復ともけ
秋浦樂冲所持の頭本より有成て素性集六版等も一枚
とひきい吉本ハ然まくふくうを思ておもむくたまほをとせ
おり枝何ぞさう故ぞくよ先やーなん一とし我りゆ
毛お走る遊もとくらむせ一枚のよせのひきくなしす皆風を
んきよとくれく福のう方感あるこもとるよ
○お園よあつてはくらと池着るなれとほくらと風やくよ
むへとらては非也毛うれ意かんぞそ風うますま

事とまこと告う方よやくまとりくわ

まの入をこぬれひあつうくひまなきほるまれとおてぐる那
花と梅うりてとそのひもねれ故のりとだみくね故とく
せ然ざくとくのひよととつう意とますづき拂ひよあき
れく余額のするくとくのひよととつう意とますづき拂ひよあき
受くるれとくす意と得くひよねれ何故とくとくそれと
首の中よしーうこのひの後あくへ行の意よたきくまき事
つを更也こた諸のじとりと明せぬ物故とくとくいひてれと
はと取くいせばうや比喩用た故のよとくとく事又とま
てとあくすせとふとは首よと事とさくひの調と捨て意とく

きのよき止とえきものあまをなすを悉くともよ安やすま竟
ハねのあへぬゆゑと其位は自得する外なしりへたりらん
らんせ乃ハゆ歸るがて因ハ日耳ハ耳もひそかもひちう
善いえむすと清つうく

○遠鏡はまぬものもはまざれどつゝ意也とひる
此をせまることすれ故に意をうんやこほりとてつゝ遠鏡
よそたゞもまぬものとひくすとひ或と虎と猫は似
ひとつよ似く只其がもととふものと何う其意味をとく
よたん

寛平沖時ときわみ宣代詔令のこと

藤原かきこつ勢

さくみれとちくとなくふあこされと誰ふまとうとくとくう
春霞つるめあくまくよだんえじくまくれひくよれ花のしげの
かまみり色れあや一つと千種よくかとよろうととこれの
花の色くうけまく新のも然きなりと落着するをすまく
さく山邊よきあくとよく花うあくぬと同まとひるとも、
それ間内數うとよくあく露を取つてくを景也う
けりとつひのなよと

在原元方

霞の内またよと遠かれとよきくちゆのひうすれ

意に失ひて車を走らしと遠うあれとれどもなへてやせざる
風よその香くそへ匂へとつれそ其よほほんねみく
そ遠きよまてひとすむちあよよかうたうてせそ
はれの音機を咲あん頃わひの山雲れまきとてな
つゝくうつ歩さりゆよ脚と若狭かと一なりせひきそ
の歩きよせ川よりみち葉なうらうなとつらも花を深山く
きよほりんねと一ね葉ハ奥山也とさへ宣らくよおろ只迎
まうれ花絵葉なうんすくと清つてとれおけは急よ
されく思ひへうれとなれれ難情也

○遠鏡よ霞ノ立ツテアル春ノ頃山ハ遠ウ見エルケレモカク

「遠カウナイカシテ吹テクル風ハ花ノ匂ヒカスルトシテ此の歌
遠ノれと遠らじ遠ノれと近ノミシヤとソラ詠調ある
なうんや遠くさんゆきとなくともさうんと出こゑ事也同
ちとゆく初月遠ウ見エルケレトモトヒムキリ又す
ら未だ未だ月に見えり花乃大やす匂ひしきりのなうす
歌や長因毛春日なうんが
うれりておれをアシムよやう りす

花これぞうおれをようううけれをはめひとくとくと
うつれ音ぢる事ヨモ起きを風ヨモ起きと詠書又うけふと
音色のうけづとくちうぎと皆ちうじかみ書る例也今見

の音より下りて詠れ意もどううつても入なりたりと之
をよく圖へるもむくに於て下れともとがやきくあ
こかみみこそせよはあらかき人知く始めりをするとつやを
よ或ふと人比あらん何あるをなむひと金をなす春れうれ
んとあらか難き處れゆなすくすて入まくかとがまく
つらうだちうとすを必ずやく立比詞なれたら立ち方よをもじ
りくも人ももぞれとあれとくも人ととぞとすまく
達たすせ外をうすく見くせ失なと誓くわから意をがふ
やねやするあそすの詞ゆとすをつりくねとそ一室むろてに

さすあらかの歌譜とがくまほのとく詠勢よりてそー川
やくら矢をき二乃的よあくらむせ豊く妙當とくまうのま
てぬあらまことあら詞と知て

歌あらす

とみひくしゆ

寫れなく野邊とふ森くこれとううよ花ようをとまくう
星とり六首を落葉とじすすり寫れ歌は鳴歌へ毎々來くえ
まほどつるを思く旅の人などのよめやーなんむね比意
野色なく寫れ歌は旅のよめやーなんむね比意
○遠鏡よこの算あらふとく詞とお匂くうくく匂へ
来くつまむてまかくうきとくても非也鳴りへとたまを

されど引れつて句讀はんや讀ひをきぬの甚
者也かと引てのとて聞えまくもあらむ事をか
そ詠うるを

此風となまくうみよ寫そこれやひたれよまくよめれ
此俳諧は梅花也よもまつて寫せびとくともいも
さとよんち同一意でよもく本詠有其花迎く立つて
らん時を寫せきり者なとよ鳴りんとよみ一歌一叶より
諸勢一がきこのや

○遠鏡よ寫カオレカ近ク來テ恨メシソウニナクカトシテ
此也寫そより迎えすとぞ有なんそなとまれる能ひ花よ

迎はるをさよ解てゆれを我やおれよとくさのり
なくがいと詰調よとじるふこちすくも今恨メシソウニナ
クとくわせ常の憂やよなむくわうとまくよあひう覺えキ

典侍給子朝臣

ちぬくれぬなみとまるねあくへ我うけすよとくまくや
泣よよりととまくんやせかきあら花はあくすくの事あ
んよまくとくとれ寫よおれ写よおれくらんやせせむくは被うれ
ひよれくぬとよ意とせせれうかーとよ唐あや
仁和の中將北又やまんの家は被合せんとよあるすよ

よみる

藤原俊彦

おれちかくすこたつてひまもあ
詞書の詰合せんとくまと一本せんともなづかよとあるよ志
こゆうへて文字行アセ歌よりゆかなふ素性の詰り同時の相
書き然あらやう

うふひまわなくよよみづ

三
四

おまへもおめり明風よわくとも鳴ん
二句頭事よおめりとあるうやふうせまゆひつぢ
やん又初句たぬよ寫れとあると拂すよ夢のじり羽を
よ敷れとあらうやん方却く花事よ出汲するを其
うきやんのめり頭事よわくとも鳴くとてうえ

とあなててそよのんゆき里をあとおへせ花をちづる
とほ遷都のちよをあはれに思ひと思ひ立ち入りよ
かまへなん今此都人をあれを國人と誰もせうせう
んむけの御事くとよ

ちる花とすうみんよのゆよわの節をとせよあんねふ

小野小町

花比つらもうひよまうれどつよ我身とひよなあやこま
此詠本の意をとよ漫ひきより諸注解まとひこそ
信よすをいひとれきせばくまく身から難さんつひ
乃事あきとえよあうむふとくすのんちよせなう

お思ひせ今いとれよ長雨を思ひせらひとも常じて切なき
とづく車くわくてとくともひ其外轉一用よすり今は花を
すして詮なきお思ひよあひ日數を過ぎとつ
○遠境よせよあひに男女のひすとす男女代申ひ
のとくせよとせよとあひる年一葉集寫れどすとこれよあ
やつせお詫よせよあひとすあはれ花を其布ねどうにすすまうと
あひたうひとすあひとすあはれ花を其布ねどうにすすまうと
それよと轉ひくんとねとすすまうとひと其季へと事と
今女をひよれたせよとれと畏くと大御せあひとすと初め

と國どすら家と脩むるを皆やんじせとあひて、是ゆゑと
ハ男すもしてたりのなれと男やうをすまへせとしと
ふされと其ひのわがとせんせはなる本としすみすみ
伊勢お詫は已くせこ成りて諒くせよとひも女ハ男
男と女せらと男せらと家と嗣ぐとしると國ちせよつ
せようは只せとての事かく是と諒くせよと女ハ男
乃承るをせよとての事かくはまくとひも女ハ男の
我身せまかやとせらとての事かく道をゆきゆのうと
とよから類の事かくと更よ男女の接ひすとせようと
つらうのすれと我身せまかたむか一またの事よまきて

お思ひのす一あひこと因て

仁和の中ねせやまんの家と被合せんとあたはよ
れる

そせば

そとがきんとよすよすれなんぢう花とてぬとそまさん
絆ちくの花もくろ形あすく余れやすよとまくらの
なれんとくを教へたがひとぬとくもくとくとくとく
まよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
つるよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
余なよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
んとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○遠境よチル花ラーツく其系ニテツナイテチラヌヤウニトメテオ
カウニヒニテハ此ニキマアモアモアモアモアモアモアモアモ
ウルトシムモ思ひあへぬあモソニテル也嘗てナシテ格ヨモアモ
シテシモシテシナシルトシム程ヤモルシテシテシテシテシ
格ヨ繫シキ事モちうれシシテシテシテシテシテシテシテシテシ
事モ

志賀乃山越ヨリサガタケルモタリテ讀ヒヒテノク。

はるひき

あつきのこまかやまくとこえくれハ道モキモアモシ社モ安乞
餘哉ヨシウ志賀キマシマウトセ都の入内は來一けり

とうき志賀寺は崇福寺ト、号す天香天皇此大津の宮ニミ
クサウトシテヨ達ルハ御寺也トシモ擣するト大和ぬ禮モア
賀内山越北道ヨリ出ヒトツトシテヨ故無神卿の官家モトモ
リテ化モ致シテヒキシナシ一拂ノモヤ思ひシくおもテキ
て志賀ヨ渥アリカセトシモアシム時モ有リモナシトアモト
今モ其官家モシテヨモセトシモ傳ヒ一拂ナリ詞書ヨ志賀ヨリゆモシ
セトシモアシムカアモトシモセトシモ傳ヒ一拂ナリ詞書ヨ志賀ヨリゆモシ
山越モ志賀モアモトシモセトシモ傳ヒ一拂ナリ詞書ヨ志賀ヨリゆモシ
達ナシムトモ同ヒルルリモシムモセトシモ傳ヒ一拂ナリ詞書ヨ志賀ヨリゆモシ
セトシモアモトシモセトシモ傳ヒ一拂ナリ詞書ヨ志賀ヨリゆモシ

せらばあまのあよひをせれ意とて此方もなきよまくもさき
この事へかがこどりせんとすみやうに立つては邊の所あ
た誰とまわんを因りて一もきよびあひてんとせんとせん
とめり思ひやう一をぬくらとおほきよみく体ひくらんあ
こゑをとく返はきてやきや一とすと男女別ちとせん方よお
こゑをすりぬる又がる雅ひる方と婦とくみなりされ
と其宮からまは中よたすあきとんんあるやあまへひそり
こそおもふべき

寛平御時辰の官の前令代

喜代野よもれづまんとおと教ふれと通とせむひぬ

つゝく摘事へおまきく女のあうきなうい端たすやるかくと
男うして遊さんとくま共あひしをゆ一あくび共てくら
るかのゆくゆうをまきんよませとまきと花ある方よひゆす
くとてく葉つてとくとくと教ふるくがよ道まひ
をひりとておうおうと余ねよわのれたすまきくへ七日よつむ
とくとてひりくにまはうち時よまくおとまくはじと巻くまくま
おまくと連とくと

山寺ふまうてとくとくとくとくとく

やとよして喜代山邊よゆく處をゆくうちかと花と数々る
花のうにうすきりよ山邊うと宿とあまく宿る處を幾々

暮さうとせらうもの多くは中まへゆきを教ひ
れうとす事も假に一門せと教ひ醫をがくくとみださうと

○寺内より里より多く花朧をあくと病の者よ
を教へと見るを遠遠よ春ハナノナル時分ニ山ニトテ
ツテ寐タ夜ハソノ花ヲ惜イクト思フユカ夢ノウチニモ
花ノナルハカリヲ見ルワイヤヒテ其よ壁也よりアラ
ハされど也事なれど、あじきつる筋違アキハヌモ
花朧と名亂など、そんニ同レヘ意得するあくされも
筋恒の、さすがに心をなしませよまたのちもねま
るる、ヒトナガラコトハナリテ今度はうちも教へ

といふは故としの壹夜間教へまじあよみがわせらるるよの
匂よ花朧とよ称る事を強くあらざるゝ事も爲れ申も
教へらるるを教へぬとすもかのれこううと同シテ
寛平清時きさひの宮の教令のと

吹き勢と音の水と一たうをせもあまかられられをアヌや
こたまきて其ヨリアセなりクンセヒキシムヒトモ水
筋よも流きこんは異端を文アなんとすうつとも
ひなまゆ、押あくせきる方々推きハマヘよやうせ詔のをくこ
うをくれ

志賀よりかアリル女とおれよもく爲れのゆふ

立よあらう立けぬよんぐおうすまる

傳正遍照

トヨタマシカアソん入よ度れれひまつまきようそとくも
お岡はまの匂六帖よとくままたまとひろうは傳正遍照也
枚たがるともとづるもあくわやつす詞をすなとつるを然
うかとがん其間はかとくそんとくとく慕るがとくこ
やじよ面白くあきの黒毛とあきよ岡をアソんル蒸乃
五番よあす史かく傳正遍照一よむよアソとほ
かうもくもくよ岡てまとねの序よあそきーとそくとくアソんと云
家よねの花せんじゆけりと入のしもと角りてアソリと讀む

名詠

ちのやまかげりあまゆを立ふすをよみこ人比奈の舞
らは我やの震波をまかせれなぬせざる入の道のくよお
かへてまくいづりくらさんとあくんれりひとつまき
あうつるやのく十姫とれ湯をせきうねどめて岡ふやくふく
獨らの詞をすくあくまくよがくくう常なるまくねゑと
を渡よせく立ふすを

○餘枚よ藤浪とは氣の花を波よばれもよきまお岡よ
なことば花のなりくとくとくおもて波をあたまの花の本
名よくあれもむけよれるおよびす月よちと蔓草の總

名もくをりう萬代室とよまひるをめぢらうもなと萬代と
書て必恭のまよ非をうと思ふ一馬の鞭なども必恭すとひづ
らと用ひりやうもうちの名あきらゆ中は藤樹と其幹と更モ
花を葉を残さずかしれつるやめなきハあちなみれ名貴
毛竹の中までわきて魔うをあら竹とつまつ妙又然すく
まくあすすまう故に只あもとのこひも萬葉の事と成て
獨其名を済るも是又あれどあこひも細井其名をとれふ
よ御ひり花を浪もくらんは放浪の花とひきく又万
葉と藤浪フナナミ、オモヒバト之思統などあるみとなむ花なみえと思ふ一
歌一す

よみ入あす

いまもうもよき匂うんたちもれの小一すまきの山吹のもれ
くらひもれ

○餘杭ヨリヤマは万葉ヨリヤマは橋ヨリヤマの湯ヨリヤマとよむた大和國高市郡也此號は
古歌ヨリヤマの傳ヨリヤマなれど藤原北宮ヨリヤマとも良ヨリヤマ都ヨリヤマと遷ヨリヤマされて後故郷
を思ひそくよみうやち同ヨリヤマは橋ヨリヤマの小湯ヨリヤマとよむた大和の萬葉ヨリヤマは橋
の湯ヨリヤマとよむた万葉ヨリヤマはあまことよむたもくもくとよむた山吹ヨリヤマの歌ヨリヤマと
よく有ヨリヤマりてこれ橋ヨリヤマの小湯ヨリヤマを字治ヨリヤマとよむとすく後ヨリヤマの
あまやとよむた萬葉ヨリヤマは收ヨリヤマせ大和の毛橋ヨリヤマ北湯ヨリヤマとよむとよく毛
橋ヨリヤマの小湯ヨリヤマの清ヨリヤマとよむた例ヨリヤマなけ湯ヨリヤマとよむた風ヨリヤマの名なまきと
小湯ヨリヤマとよく清ヨリヤマともよむた事ヨリヤマ海ヨリヤマなまきとよむたせ波ヨリヤマの

く山城の守後門は在一湯なりて今大水は癪きくすとす
又源氏守後十帖は明るみより此湯乃くすまひより古橋乃れ
アリヤマホテ寫一歩く秋も橋の小湯此處もかたうとす
よをり也す中四帖の内名所など達つて事そとくふえを況
や都出しきるをぎりも傍モカタスノソハ化モ諸のむろ故
よなづくせりふ所をとへてにじわらめう事也事情思
ア又山城守記の残缺字治門の西は舊名号橋門とある
をせよち一御き橋のあやトヨモ呼ナガアシムをもんじ
そ其湯はよ敷をあまくあんたまを浅よみびの湯と云ふ
又同又元暦の合戦よ高銀景季は被川乃先鋒を主導ひて

（了）

家へ之を橋の小湯う濟り被せれ事は往々アラモトリ星を其頃
さる所なまんはアラモトリ星を其頃アラモトリ星を其頃
（了）
ま雨は匂ふつるをあれくよ香くなれうやまくまよたれ
まよまよたあやなまゆうれんとアラモトリ星を其頃アラモトリ
アハ算すアラモトリ星其脅などの植つてんと女のも思ひてよあつとも
うれまよアーミン人のアラモトリ星を其脅の植つてんと女のも思ひてよあつとも
うの川内がとくよやすまきのまやくもとよあつ

（了）

吉野川左のゆまくゆくをあみけくうれいあひよくを

岸なり山川を吹きたる水也また風を同へて船のう
けまくはりにひそむとどきなつや

○遠鏡又吉野川ノ岸ナ山吹ラ見レハ風力吹テナルカ其風
テ川ノ水カウコクニヨツテ底ヘ移ツタ影マテカチツタロイトシ
ヨリ北を岸なり山川はちうすいをゆめうこよ新ハ故より
ともよみかずく車の花せんよ花の新も一ほよぢ
んま橋タ水のうおくう一あと待ヘリんやうつゝ同んよハニ
四匁代あひくよ浪ウキ事めくと初もくらせるをや

歌へす

よみ人あひ

、まわなく井戸代ゆきちよよくり花のさうとよあす一あ

この、すりうり入れば、ちくちく風のうよとくうこせ
詠の意ゆく夕懐を詠ほ枕詞とすもの、此也井戸代形賓
とくよとせなくりときあくん時よおま門ては、井戸代ひ門よ
古のは志り井戸代がくすの枕あくんや、は、井戸代ひ門よ
雪れなどよまきとねをみと思ふて、次も平島さく佐保乃川
轟する井戸代の森ゑみ數すく皆形賓也枕詞と深すくと
まわる」といふやう

うせい

思ふとも春の山邊ようちむまくせひとと、すみ旅ひあて
旅ひあて一舟詠おまくとく聞もあくよーかとよなれい只も
つる事と詠うといふも過ちてにぎやせ度のあすつう

げてすむの數を皆同一さうを取の詞とへ宣ゆてる碑文
ハ或ひもかく一體のまゝせすいふくわま引きとてやうよ二三
ノ一と出でる意を取らへて書きをうきてある自然一門のてこ
はと秦と外よこ

書かとくするをとよから

足つす

ありさらなあこちへすと年月代へりとくもあをやのう承
年月内よりすとるがまおなひよとさうハ樂つむ時れ盛
されとほらめまゐのくもものぞくゆく也奇比意すと
のく年月代へりとあきとまくわやうへあくともえをつるぬ
ひとくを思ひのうとく詞まと合せく意得へ一回入ればれ

てまちうこ月にすきとくらむれ代盛とすとくくみやよなどとま
とれむ意今とくもくとどよ挿らだらと愛一極とゑひを
財とけつる也墨を家集六北などと暮暮とへるは後入を
と済せられとかくまきへりもやのうがい其ま北内と在て
はそへすとくぬ諧調なりと同和へとい年月とからうたのう
よはすとくのれまを年月とからんやと

○ 除林さま家集をやくよ内内拂塵風の歌とくとくとくとくは
一とく十首、つらよとれおうすとく墨とあきハゆくもり家
暮の意よよとくとくと取つてかくまきへりわへつと詞あ
るよつまく共集はてはよれおう歌とつらよ遠鏡も是よ近

ち共よ娘也遠きめ意よりたんすをまこととつ詞あり
よ付く事かと過るをよがりとし詞事をそくじにまわす
してすみん事すれなき事せばや撰集よかまてを
やうの船便集へ海よまちこち捨入集て端事など放失所
やうむれせん達び集よもくあやまれつて事かへとまて
た政集よ付く事くらも今十そ北内又へるやうよんの事
えくゆよ六首無題うぢを書つてゐるをだまと七首一緒の事
を其初叢よあまたよれつゝ思ひく序をと歌を加へる事
又外のれ道をふね花つて草合す而三月ほぐる或も六月と
らく七日きぬうせ日々十音ノ詠引ゝをなと画のまよし

と書ふるが是のみ師走とせん事うやうくせよ本間ち
風よすゑくらす雪もまくとども花うれうアヒムシヨリセ
原吉と繪筆や其外をあれ初乃ま中此春初の支中ひ支
とひ季ともすくせく押あくと書かへらやうく次を承
坐れ候のむれつゝよりゆりけりやともとだくよかとらる奇
ともよもとおまとおまとおまと今の原走をせ數ひよて取よ
やうじよ當りとあくとまくとよか

はく桂

なきとじる行なれとうひもとをねぐく成ぬつたり
やよしのはきるをくじよどえりよ山川より花の流連

きよとよみる

深養文

花ちまき水のまふくとあられたらひはまもなくれやまもす
花の散く涼と其の筋は隨ひく令まとひまと花のまきの
まくれま葉と成くまきとなくまよひと夏うきの
思ひの外れりまきとあられを強ちよ求めらるゝあら
す賀部よしの岩根ととて藤もとつるよ風へくはくひる
とすむかまは意よあるせ隈をかどす御んこうよまくめの
鳥とよ誰一ヶもとくわおづなと求つてとせむとせまよ
えがれと星も暗あおほるかくよく見とくとなくまう乃
意本とよかたと先の書よせれをうへるなれいをとす

同一意とくならう重ねたりひく其諸意をせてもう初とくを
ゆとりけり吾とすくわと本末の事委とてよだす
まきと晴とよみる

えとく

さくとくをゆくまくひくよまくまくひく道すたちぬとくまく
何とあきとあらひと春代々とせの、いちうよわなまくよ
まくひくあまくまくすたとくとくとくやうくまくひく事
聞えなまく其うとくあら立刷るまくも今くすかにと
のやよ立ちゆきとくよあくよとく思ひひとまくと勧きたる
せあらまくとくよとくれまく晴せ

○餘秋よせまく葉と上の春をまたくるやうことよみる奇

又はさへとく春の事は用あらずも無いと、さんな
内事と外事と非也其詔何う處は用なしと、さん却く盡
きとてよみがへりてたちぬと、さんあるのこは尽まひ事
とまえことつねいさん事がうをあへ又まへあへるや
けにれどもく、盡をあへまへる事其筋より
遠鏡を是とすと、萬を立れ縁よつむせと、ひくこそひと
よ萬の事をきいたと、意を過る甚しき事也

寛平歩時記と云ふ書の説合あり

おさへの勢

聲たる事なきやうひすひとくさくひとくの事

二ハ上ニ詠せまゝ爲代寄々う國スナリをよめるとあま同
意事とくまぐたる絶るあるとゆきか立くいふ事もなきと、さくも
むきなりとくらむる絶るなく鳴あまくさんよあくとくす
○遠鏡は鳴ハ隨分絶ス鳴テ恨三ヨヤイイカニモナキトコロチ
ヤとひらひ眼セニハ喜春ぬまと鳴ヒと鳴ヒとまくねねと一年
ユニ度とくと聞てき聲なますされいじらなくてまくつて
てな事とくらむる事も根は鳥と古葉とるもんなる事
内事ある此事とくはれ鳴きあくよかをと見て車
をなきとく今とよ鳴ともし行なれをちる花の鳴
とあらねあらひ吹風を鳴くうみよあるがときもなれ

の報あつたをたまは耳なれども心は思ひとれ
るなり一セキとて聲だるすなりやとあらを鳴くうみよ
と聞こきなんや又恨そなきとあつてさんを異とすが
すやあじてさまれ春のくとすれなあはるをせきとすが
あはるひとて來じたまはく年よまれなとづくとせき
を鳴くはりよとけいもおれつまきなまれきと娘ニシヨリ
びしん更ニ諸意とくあわせらむとよ雪の本よ降うれきと
ある國うつよはり秋も夜とて北風と思ひれきと國一聲
也お同よよゆくはりと寫はあつてかきに今一筆おとえ
くらねうそよくと東海すとてやる心うちの上よ匂を度せ也。

やうじめつゝやうやう花川によもうとけりぬとくとみくよ
かる

船恒

やもとさきのとばなふちのれを發されとてこくよらう
餘根よ花つこと野山をよせく花をほして佛よ奉立を言
なとふをよしろとよ號を船恒集よ船つと嘗とよく
ききううやよ先と我ほむ花うなくよ是と嘗れまゆそ
鳴れと摘よあくす切徳のあははゆづくよひとよ
る然とよすよ開も花つことと二三月のうち野山よ被く社をつ
て先祖の墓を祭り事と今の京人も開口と枝りよよすと
花摘と草花をとつまひて歸るをきとつらせ等れ

三月一六日又舟園より摘入ればまことに御さん室や
つうそとあらわやうく蓮華野の茶畠の墓原よき向ふなまき
をもがまくしてゆくとやん方やけいをやけり人の向
えりの引くとあらわにあらわれこころなましきれをぬくま
きわはあめを散へて花よけ付まひめうよと人よまく
あくせをもれだる思ひ手すなり道中みそくやよまくゆ
きあらん病魔をす其せよおのくつまう花むとこれお
らんとまちる花とどどる中よ角くわゆせ晴らす
○餘杭は春め暮すくわとれつま共内すきわとめんす
のなきとあれよとよきくわとおとこわと彼せようい花と

まこと其ぞひきの三月也と頗りとて夢も聞とふ事よ
あひに壁塗のすきとつとむすりむとむとむとむとむと
かともとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
心見えすと難むる人あらん、然てほひ詞書よ只花つこより
歸りくる女共をだくとむとととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
すととととととととととととととととととととととと
と母恩よれつむ人れきなとすとよひにりりりりりり
と春れせの花をうむくすんととせとととととととと
なとあると思ひすは山野の草木花咲むとひ揚めやま事よ

て書はゆる事もすらなほんは筆花つゝも落花の酒
なると祝のあよとおもへ時日ともかく成一トキの紀氏
の通をからむすもすも同一ひなきものありとあると
落花れどもアリとさよがりけたる事なきを今代詞書
ときを惜むももむる證也とせんうなれ然くも被志蟹
の山越えく道をやあつむ花う数ノリモシタ今く女内
群うと形容を以てんむ其まとの花をちゆきちゆも
を詠くあつゆかれてよし其時二月也ホ三月のち一失考
とせんと其實あらんうに書あらは前代あらぐの花を
歌うとくよ時をうおおもりと書きりくすせりされ

わだやう落花れわうは中よまく思志賀ち山越えまとあ
るざれく其日よもがきをあき一成さんせんつひ撰集のと
かやくさんめの常比事也これも實又まことて落花の
次なまセと其日よも書歩て汝後もとひゆてき又今ひ
詔を其日よ一落花乃らうなす只花つゝありうりうるぬ
りとアラムとみまく彼志賀れ山越のあらりよかくよ
くゆくよ

○遠境よ一本くチツテユク花コトニヒつも非也花のあこ
とくとくおもちかねとくとく用ソリんやそひうちれ
くまくよもあうき事也教れとくとくおもちやく花入

らむきん事海をよみ

やまひのつこさすあらすもけよゆきりはなわく入る
ほりうきる
なりじの妙

卷之三

なりひの歎

及ふ事なば 滅勢ありとせ 翌書をやひつてす われどあまむ
本代は、あくまでも多く日ち晦日也との不つての御書を、ふるま國
く次なる已神は今日のことよりされにゆきの二首と皆書の歌
をも書論をよどやすひりてすもすら方と、つるまよ酒をくくらまを
詠じ紫草集よぬきほそあひくおつるをれ花またくよ
ひきりと思へもし、有聲乎一聲をける母業平集と母集中を御
臣れすのかきりと書あめたるも謡なきあくされどそれやう
て古人の筆と云ふくちあとのと書ぬきあれ、諱ひをぬりの邊今
年此曲は春とこうりてきみ、伊勢わ諸より入來、ゆめりそ縛
まつて御立ても更よけ、さうもされどもね縛はつこゆれ

口とばせすやうひつらうふ其日雨もあらずと書きつゝ
ちの肉なる或一りを以てとくわやを含きしれ濡つてあひそ
おつるといふ句調何となく傳へ来るも圓のち方より裏へたる
家とくとくかよは奉アセヌ媚ノ万葉と見るなど例の漫文
奥へるすまゝもあきすぎのひ被物語と朝臣氏自記す
とうる筆記かくまとく幾よ被や拂く其集又撰へせたとの少
かぬよしれど其諱をあく其所は安さきを以て相送の事と
思ふをかくと詔比意ありしきまじ今日かかふとて
ぬきすれも雨の晴間已ゆあくもぬまくもあつるとソラ
てまむ間々見をまけモハ意をあらわまうひ難きにせど事と

なきあひくおつるといつるふうとき也風舎村すくあひくとふ
詠すことを詠をみてたくぬ毛とあを今本北野くまは貴
恩とよさんとあくせまれる倍細ひくひくかりとくわやをと向
えすとも金日あんは雨よせまきて多めくじともがなん
なふ明りを待んをまく

○後校よやくひを今けらもなきとまの別を北野殘
取あつたこれもなまほくあくおつるといつるをとくと向を一
度の間よまほく只一日よ成られもまか別花の名残取あつ
は思ても濡りとあひく折つると贈しとといふ昔よ始
と幾日をあくへまちと北野數をあくねまくとまくとまく

ゆせよ今よせまれる語よあすこれを今日もすこひ
なと聞きなんや常よじくもなへて程もうへたと
てはかくすまどん語の量かな是たうせとくま
あきらめ又また別れ船の船を取あつて思へとそ
あひれども事へうおとわらやくとまを立ちて見
んなどやうれいにあつてこだまの盛と花の咲る
まの内とみきくやこなんとあへてたる雅情也
○お同よやうひ力海とせまるとハ年の間よまへくも
などひそかにぞ限らずよきおちよをとどる
船をひとのうそく幾と、たん事へうくとあへ

せあるがハセモカムハシヨハシヨハシモカ當然の真心なむ
上多めあるとて何の事ともあれも

○遠鏡ニ春ハタイクカモアルテハ有マイモウ當年
ノ内ニハタツタケフ一日ナラテハ春ハナイト存フ、故ニサ
トハタツタケセシモハシヨアヒヤヒシテ盡日又シキ
キリミハ幾日かの間よホ^{マダ}の語と想へ又あくと思ふとアル
テハ有マイトキリテ又キハシヨタツタ一日ナラテハト
つじつとなくも更よ又いれろんとも思ひもとどりま
まご費ひ有レバ少^シの諸事も首^タきをなす更よとわらす

事也志ハシムの者とすて春ハイクカモ有テハアルマヒ
シニ意ならんヨハシハハトモアシハソラシメトナリトハ
ルシス又モウタツタケフ一日ナラテハ春ハナイト存ル故ニ
の意キハヒトメナシトハアシト思ハナシムトハアシ
ラシカシモ達ノ方潤サシ似内テヨモ食モレ俚言ニシテ
ヤドリシキナシモ走ヒタシモナシモ意モトモナシモノ
キトワヒヨ共實ヒ推キハ諸意モ諸調モカヘ時ハシラセ
カ走後ヨリ始ムヨ今ノ日事ナシモハヒトヨハ同一接タ
シテハ彼勢急ヨリト匀調ヒ亂キヒヤウテ晦日之事也
シテモウ春ノアヒタハ何ホトモナケレハトシヤウヌミケル

ナシスや幸え今ハ端書トシテ達ニモナシケテ其ニ
ユカシテんとすう故ニ諸注セモクニ解アヒテある事
キモシテるナリ也

亭子虎の御令ニまわらとの事 み川裕

シテモシテ春を恩ニムトシたゞトシテモモシ花スナリス
天亭子虎寺令を萬より延喜十三年トするモハ終モテ
寔ト十二年也寺令を夏教ニ御ニ後の事ナシモ有ル
やナシト御用トモシトシテモツルトシテハ四五月トナリ
シテ其う年ノ月ノ十二年又元ナリトモハ十三年ナリ
シテ事ト御用トシテハトシテ

春下四十六

國學御書物所 京都三條通堀町 出雲寺松栢堂

